

「一匹千円だ」。居ても立つてもいられず、八森・岩館両漁港を受け持つ能代支局の記者に電話してしまった。18日午後、男鹿市内のスーパーで鮮魚コーナーに立ち寄った時のこと。今季の価格はとうだろう。1匹ずつ売られる沖合ハタハタの値段を示すシールをのぞくと、1匹1005円の高値のものもあり驚いた。

この時は8匹が並んでいたが、最も安くても600円を超す。どれも身が大きく、脂が乗った身を食べたいと思いつつ、買い控えることにした。同時に、現状のハタハタ供給量がかなり少ないのだから

地方点描

今季はどうなる

うとも想像させられた。

近年のハタハタ漁は不振を極めている。特に昨季は悲惨だった。沖合と沿岸合わせて約17トン、禁漁明けの1995年以降で最も低く、前年の計111トンを大幅に下回った。

県は今日11日のハタハタ資源対策協議会の場で、今季の漁獲量について「資源量がほとんどなく、漁獲はほぼない」との推定を公表した。資源量の落ち込みは、海水温の上昇が一因と指摘されているが

根本的な要因は明らかではない。

今後、産卵のためにブリコを抱えたハタハタを沿岸で取る季節ハタハタ漁の時期になる。同市北浦の70代の漁師は「いないのは分かっているけど、もしかしたらいつばい来るかもしれないという気持ちもある」と今年も船を出す。

海水温上昇は人間の手ではどうにもできない。取れる魚で稼ぐという考え方も分かるし、ハタハタに依存してられないのも事実だ。それでもいつかまた、ハタハタとブリコがあふれる風景が戻るのではという期待も持ち続けている。 (男鹿支局長・阿部拓郎)